第４章　第17次調査地点における調査成果

本調査地点では、古墳時代初頭・古代・中世前半～中世後半、そして、近世～近代の遺構・遺物を検出した。その中で、東側に隣接する第７次調査地点の遺構群と連続的な構成を有す古墳時代初頭と中世前半の状況については、ここで両調査地点の成果を合わせて本調査地点付近の空間利用状況を提示し、調査成果のまとめとする。また、中世前半については、範囲を南北に拡大して既調査報告成果との関係にも触れておこう。

⑴　古墳時代初頭における空間利用状況

ａ．遺構配置の状況

第17次調査地点（以下、本調査地点とする。）では、調査区西端を南北に走る溝１の東側において、北側に住居域とその南に近接して形成された焼土集中域、そして住居域から離れて、南側に炉跡群や粘土埋納土坑などが配される。こうした遺構は、本調査地点の東端に集中しており、東側の第７次調査地点に広がる様相を呈すことから、本調査地点と同調査地点の成果を総合して、本時期の遺構構成を改めて検討しよう。

第７次調査地点の主たる遺構配置は、北側に焼土集中を伴う複数の住居遺構（SH1・３・４）、その南に土器集中域（SX1）と不規則な小規模溝群（SD1～３・５）そして掘立柱建物群（SB1・２）と柵状遺構（SF1）、その東側に井戸（SE1）、さらに調査区南端付近に粘土埋納土坑（SK3・４）という関係を示す（図81）。また、調査区中央部には、これらの遺構群の配置を縦断する形で、調査区を南北に区切る溝（SD4）が走る。遺構群の時期は、本調査地点の遺構群と同じ古墳時代初頭の枠におさまると同時に、遺構配置においても本調査地点との共通点が看取される。

まず、両調査地点を合わせた状態で遺構配置状況を概観すると、本調査地点溝１（以下、本調査地点を省略する。）に対してほぼ直交する方向で、BU63付近から南東に向けて便宜的に設定したＡライン（同図）の北側と南側で、遺構の種類やその密度が異なることが読み取れる。同ライン以北では、竪穴住居群・掘立柱建物群・井戸といった集落を構成する主要な遺構群のほかに、焼土集中関連遺構・不規則な小規模な溝群・土器溜まりなどが形成され、高い遺構密度を呈している。こうした多岐にわたる遺構は東側に広がる第７次調査地点に分布する傾向が強い。また、同調査域では遺構間に重複関係も認められるなど、複数回にわたる利用段階が想定される。それに対して、同ライン以南の範囲は、西側の本調査地点を中心に、炉跡群や粘土埋納土坑群などが分散的に分布するのみで遺構密度は低い。このように両域間の違いは明瞭である。

両域を縦断して南北を走るのが、西端部に位置する溝１と東よりに位置する第７次SD4である。溝１では、下層部に形成された流路の利用時期に対応する古段階と、同部分が埋没したのちに土器が廃棄される上層に対応する新段階との２時期の利用が確認される。

ｂ．各遺構の同時性

以上にあげた遺構群には、遺構の重複関係や溝１の利用状況から、少なくとも新・古の２段階の形成時期が想定される。各遺構の時期的な関係性を探ってみよう。

【北側空間の遺構（図81）**】**　主要な住居遺構は58～62ラインに分布し、Ａラインに沿って東西方向に並ぶ。西から、竪穴住居１（以下、住居１と略し、他も同様に記す。住居２は同１に含めて扱う。）、第７次SH1とその一部を構成する住居３（以下、両報告を合わせて第７次SH1とする。）、第７次SH3・SH4である。これらの住居遺構の重複関係あるいは各遺構間の距離に注目して、各遺構の同時性の可能性を考えてみよう。

まず、重複関係を有するのは第７次SH1とSH3であり、後者が上位に位置する。また、住居間の距離は、住居１と第７次SH1との間隔が２ｍ弱に対して、住居１と第７次SH3では約５ｍの間隔が保たれる。住居形態を復元

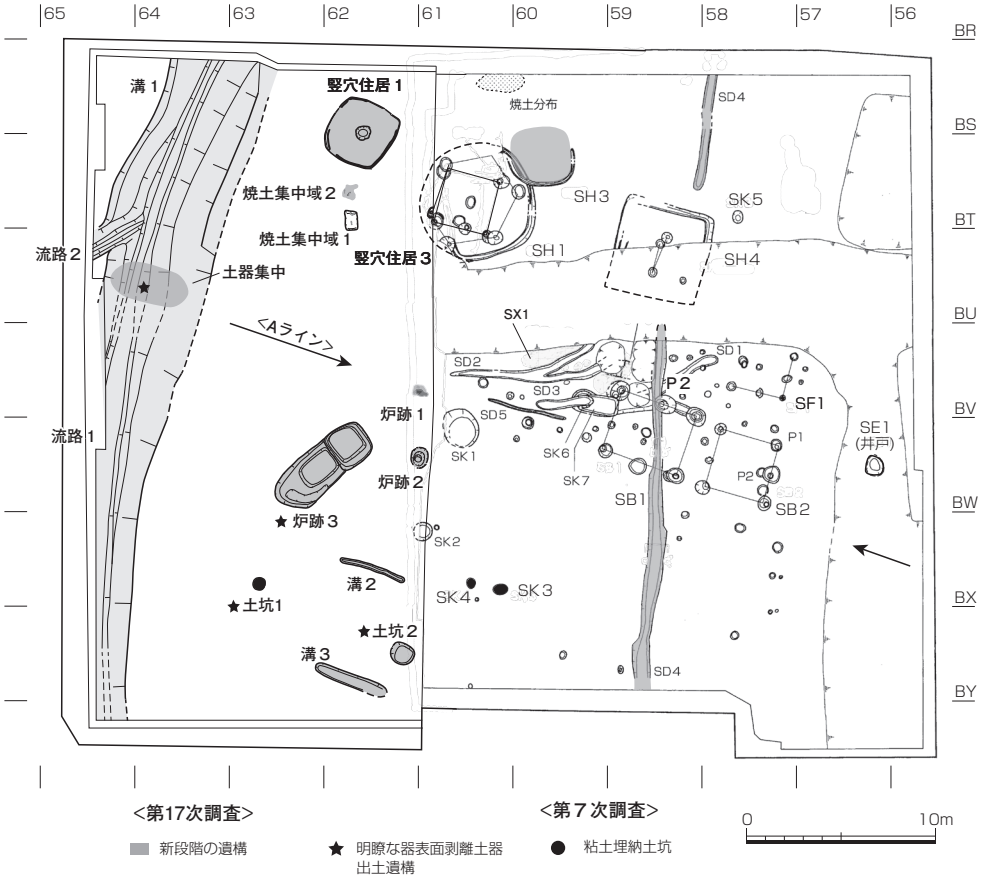

図81　第７次調査・第17次調査地点における古墳時代初頭の遺構配置（縮尺1/400）

して各住居の同時性を勘案すると、前者の位置関係では困難であるが、後者では同時性の想定が可能であろう。こうした状況から、新・古の２段階を想定するならば、古段階に第７次SH1、新段階に住居１と第７次SH3との関係が指摘される。両段階の住居形態を比較すると、古段階の第７次SH1は直径６×6.4mの円～隅丸方形プランを呈し、直径0.7～0.8mの柱穴６本（下部には４本柱の段階を有す）を有するのに対して、新段階に位置づけられる２棟の住居は、一辺3.6m前後あるいは約３m前後の隅丸方形プランを呈しており、小形で柱穴を有さない非常に簡易な形態を示す点において、両者間の構造的な違いは明らかである。出土遺物についても、完形の管玉が出土した第７次SH1と叩き石が出土したSH3との違いに注意がおよぶ。こうした状況から、新・古の両段階において、住居遺構の機能差を想定することに大きな齟齬は生じないだろう。具体的には、新段階の住居は、通常の居住機能とは異なる場、例えば作業場的な建物の可能性が想起される。一方、こうした住居遺構群の東端に位置する第７次SH4は、第７次SH1とSH3のいずれとも３～4.5mの間隔を保つ。形態は、一辺約５mの方形住居で直径0.55m前後の柱穴２本を有している。こうした位置関係や形態から新・古段階の帰属を判断することは難しいが、注目されるのは、同住居と掘立柱建物群である第７次SB1・SB2、あるいは同SH1の４本柱の軸方向の共通性の高さであり、同SB1の西辺ラインはSH4の柱穴ラインにほとんど一致する点である。これらの軸方向は、住居１あるいは第７次SH3とは異なる。こうした遺構の位置関係から、第７次SH4は同掘立柱建物群や同SH1との共伴関係を予想し、同建物群を含めて古段階に属すると判断することとなった。

住居遺構周辺に分布する焼土集中域１・２と第７次焼土分布域については、住居遺構との距離を検討すると、古段階の第７次SH1のみが３m程度の間隔を有す。それに対して新段階の住居との間隔は１～２mにとどまって

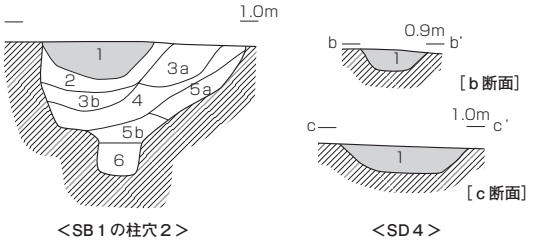

図82　第７次調査掘立柱建物１・溝４の断面（縮尺1/40）
（山本編2007に加筆）

おり、焼成作業の安全性を勘案すると、その同時性は考えにくい。よって、これらの遺構は古段階の第７次SH1との同時性が想定される。また、第７次SH1の南側に位置する同SX1（土器溜まり）および同SD1～３・５の不規則な小規模溝群などの遺構については、個々の重複関係が不明瞭であり新古段階の区分に対する判断は難しい。古段階に位置づけた第７次掘立柱建物SB1との上下関係も、明瞭な分離を示していないことから、これらの遺構群は掘立柱建物遺構とともに、古段階の時期幅の中で形成された遺構群と捉え、第７次SH1の継続時期内での関連性を考えたい。

以上のように想定すると、古段階の遺構は、溝１の古段階を含めて、住居群（第７次SH1・SH4）とその周囲に形成される焼土集中域１・２、第７次調査の焼土分布・土器溜まり（第７次SX1）・小規模溝群・掘立柱建物等（第７次SB1・２、SF1）で構成されることとなる。東側の井戸も、その配置から本段階に含まれる可能性があろう。一方、新段階では、住居１・第７次SH3のほかに同SD4があげられる。同溝は同SB1が上部に重複する状態で報告されている。しかし、改めて断面図面を確認すると、SD4と重複するSB1の柱穴Ｐ２の１層（東西断面）の形状はSD4の断面とほとんど一致している（図82：トーン部分）。この点を再評価すると両遺構間の重複関係は逆転し、SD4は新段階の溝との評価となる。また、SD4と第７次SH4の位置関係において、住居形態を復元すると両者の同時性は考えにくいことからも、同住居廃棄後に空間を区画する溝として、新段階に形成されたと考えられる。

【南側空間の遺構（図81）**】**　Ａライン以南の遺構群は、炉跡３基・土坑６基が挙げられる。北側の遺構分布とは異なり、重複関係を有する遺構はなく、一定の間隔が保たれて分散的な配置を呈す。炉跡１～３は東西約８ｍの空間に約３ｍ間隔で配される。たわみ状の第７次SK1を除くと、周辺に他の主要な遺構は未確認であり、同域は加熱作業の場として、周囲からの空間的分離が意識されていた状況が予想される。その約５ｍ南には、粘土を埋納した土坑（土坑１、第７次SK3・４）が東西に並ぶ。これらの遺構形成時期の同時性を示す積極的証拠は乏しいが、その配置は、一時期あるいはごく短期間の時期幅におさまる可能性を想起させる。

ｃ．本調査地点の空間利用状況

改めて、古段階と新段階の遺構をまとめて全体像を復元しよう（図81）。

【古段階】　本調査地点の西端部を南北方向の溝１が区切り、その東側に広がる空間は集落の一部として利用されている。同溝から約10ｍ離れて形成された第７次SH1は、直径は約６～6.4ｍを測り、６本柱の構造で建て替えが確認されているように、本地点では中心的な住居に位置づけられる。管玉の存在も注目される。同住居周辺での焼成作業により焼土集中域１・２や第７次焼土分布が形成される。使用された多量の土器は住居の南側に廃棄された可能性が考えられる。同住居の東約４ｍには第７次SH4が軸を揃えて並ぶ。さらに同住居の南側には、やはり約４ｍの間隔で掘立柱建物である第７次SB1・２がほとんど平行して配される。SB2の東約４ｍに第７次井戸１（SE1）が位置しており、その配置から古段階に属する可能性が高いと考えられる。いずれも４ｍ程度の間隔で配されている点には、空間利用に際しての計画性が予想される。形態的に異なる第７次SH1と同SH4との関係については、後者から出土した叩き石・被熱礫の存在も注目され、機能面での違いが予想される。

【新段階】　本調査地点の北端付近に、小形で簡易な構造の住居１と第７次SH3が５ｍ強の間隔をもって住居域を形成する。古段階の第７次SH1周辺である。同域から南約10ｍの場所には、高温作業を示す炉跡１～３が構築されており、前述したように加熱作業域を形成する。さらに、その南側４～５ｍ付近には粘土を埋納した土坑３

基（土坑１、・第７次SK３・４）が東西方向に点々と並ぶ。第７次SH３では叩き石が出土しており、住居形態の特殊性も考慮すると、作業場としての機能が一つの可能性としてあげられる。以上の遺構配置やその内容から、本段階には、第17次調査地点を中心に高温の加熱作業の場が形成された状況が復元される。その作業空間の規模は、西側を古段階～新段階に存在する溝１が、そして東側を第７次SD４が区切ると想定すると、東西幅25m～30mの広がりが求められる。

【新段階の出土遺物】　第17次調査地点において、遺構内あるいは遺構に関連した状態で土器が出土した主たる遺構は、炉跡３・焼土集中域１・土坑１・土坑２・溝１が挙げられる。特に、溝１からは、その上層部において一括性の高い状態で土器がまとまって検出された。これらの遺構の中で、焼土集中域１以外から、器表面に明瞭な剥離痕跡を有する土器片やその剥離片が出土しており、そのほとんどが高杯・鉢に限定的な状態が看取された。焼土集中域１周辺で出土した土器には剥離痕跡は確認されていないことから、同特徴を有す土器は新段階に属する遺構に対応しており、同時期に形成された状況を呈する。第７次調査地点にまで範囲を広げてみても、こうした剥離痕跡を明瞭に有する土器は、第７次SX１（土器溜まり）を含めて古段階の遺構から明確なものは報告されていない。

出土遺物量の多い溝１上層出土遺物群には、うろこ状に剥離した剥離面あるいは同剥片が含まれており、その中の数片あるいは土坑１の出土遺物には土器焼成時破損の可能性が残る。しかし、剥離痕跡のみの特徴では同破損品の認定には弱く、うろこ状剥離面の色調においても明瞭な痕跡とはいいがたい点から、全体的には焼成時破損土器との評価に至っていない。火災などの２次焼成の可能性も考えられるが、一方で、本文中で指摘したが、２次焼成による変色が明瞭な土器には剥離痕跡が確認されないのに対して、同変色がほとんど確認されない土器に剥離が顕著な点、あるいは器種の偏りについてもやや疑問が残る。いずれにしても、現状では新段階における土器には、そうした剥離痕跡が多い点を指摘し、その要因については今後の課題としておきたい。

なお、出土遺物に関しては、器表面剥離土器や土器焼成時破損品については、田﨑博之氏・大久保徹也氏にご教示いただいた。

ｄ．集落内における手工業生産の場の形成

本調査地点は、鹿田遺跡内の西端部周辺に位置するが（図１・２）、さらに西側約10mにあたる第６次調査地点では、本時期の明確な遺構は極めて希薄であり（松木他編1997）、生活域外の状態を示す。両調査地点の位置関係を考えると、溝１が古墳時代集落の西端を区切るラインと考えてもよいであろう。本調査地点および第７次調査地点は、まさにその西端部に位置することとなる。そして、少なくとも新段階には、同域に溝１と第７次SD４によって区切られた手工業生産の場が、集落の周縁部に置かれた状況が復元される。さらに、本調査地点の北側約30mに位置する第24次調査地点では、本時期の遺構がほとんど検出されないなかで４基の土器棺が確認されており（南2018）、墓域としての利用が考えられる。本調査地点の状況は集落の西端付近の空間利用を考える上で参考になろう。

⑵　中世前半における屋敷地区画

本調査地点で検出された溝は、東側に隣接する第７次調査地点に直接つながるほか、溝のライン上において、周辺の既調査地点の溝との対応関係を見出すことができる。対象となる調査地点は、第７次調査地点のほかに、南側では23mの間隔を有す第26次調査地点、西側では10mの間隔を有す第６次調査地点、そして北側では30mの間隔を有す第24次調査地点があげられる。その範囲は南北約160m・東西約80mを測り、鹿田遺跡内において西端の中央部に位置する空間である（図１・２・83）。東西方向の溝が直接的に連続する本調査地点と第７次調査地点間の溝の対応関係は、本調査地点の溝15（以下、S17－溝15とする。他も同様）とS7－SD23、S17－溝17とS7－SD22、S17－溝８とS7－SD6に求められ、それぞれが同一溝を構成する。また、直接的に連続はしていないが、

S17－溝11はS7－溝19に対応する可能性も残る（図83）。

こうした溝のライン上でのつながりによって、構内座標BTライン（以下、構内座標は略す）以南には、溝によって四辺が区画された屋敷地を抽出することができる。同辺を構成する溝は、本調査地点・第７次調査地点・第26次調査地点そして第６次調査地点に求められる（図83）。同屋敷地の区画について、12世紀後半と13世紀～14世紀前葉の二つの時期の状況を検討しよう。

ａ．12世紀後半（図83：トーン部分）

BTライン以南に抽出される屋敷地の北辺ラインは、第７・17次調査地点の南端を東西に走るS17－溝８とS7－SD6、そしてライン上でつながるS6－SD10で構成される。その長さは58mを測る。両端は丸く収束しており、屋敷地コーナー部は開放状態を呈する。その他に、同屋敷地の区画との関連性が想定される溝は、西辺ラインでは南北方向を示すS6－SD17、東辺ラインではS7－SD8・９と南北方向において同一ラインを構成するS26－溝18が挙げられる。南辺については、東西方向のS26－溝17と同－溝19が候補となるが、両溝の埋没時期に差は報告されておらず（山口2019）、同時併存となると、区画溝としては内側の溝であるS26－溝17が対応すると判断される。ところで、同溝を含む第26次調査地点のS26－溝17～19の時期は、いずれも13世紀前葉として報告されており（山口2019）、本段階の溝群の時期と時間的齟齬が指摘される。ただし、同時期差は溝の埋没時期の時間差であることを考慮すると、必ずしも機能時期が異なるとは言えない。これらの溝の中でS26－溝18は、S7－SD8・９と南北ラインが一致するほか、次段階の溝との重複関係においても本段階の溝群との共通性が確認される。よって、機能した時期は本段階に遡ると判断した。

以上の溝のラインを参考にして、屋敷地の区画ラインを構内座標に置き換えると、北辺はBYライン、東辺は57ライン、西辺は71ラインの西0.5mの南北軸、そして、南辺はCEライン付近に対応する。その結果、S17－溝８が位置するBYラインを北辺として南側に区画された屋敷地の大きさは、溝の中心間で東西幅70m・南北幅約30m、溝の外縁端部では東西幅72m・南北幅32mを測る。ここで得られた数値は、東西2/3町（約72m）・南北１/３町（約36m）の数値よりはやや短い傾向が読み取れるが、計測上の誤差も勘案すると、おおむね近い数値と評価される。つまり、１/３町の２区画を東西に合わせた状態とも捉えられる。

ｂ．13世紀～14世紀前葉（図83）

【BTライン以南の状況】　本時期の屋敷地は前段階から北側への拡大が認められる。北辺を構成する溝は、本調査地点と第７次調査地点で一連の溝となるS17－溝15とS7－SD23であり、BUラインを東西に走る。同－SD23は、56ライン付近で南に向けて直角に曲がり、南北方向のS7－SD24につながる。ただし、BUライン上の溝は56ライン以東にも延びている。北辺の溝から南に向かうS7－SD24は、南側の第26次調査地点のS26－溝22ａにライン上でつながり、本屋敷地の東辺を構成する。両溝は形態的にも類似性が高く一連の同一溝と理解される。同溝に直交して西方に伸びる東西溝がS26－溝22ｂであり、屋敷地の南辺を区画する溝と考えられる。西辺を構成する溝は、北辺および南辺の溝と直接に連結してはいないが、その配置から第６次調査地点のSD13～16に求められる。その中で、S7－SD24と同時期を示すのがS6－SD14である。

以上の溝の配置から想定される屋敷地の区画ラインを構内座標に置き換えると、北辺がBUライン、東辺が56ラインから57ラインへ向かう南北軸、南辺がCEラインの南３mのライン、西辺が70ラインにそれぞれ対応する。その規模は、溝の中心間で東西幅約68m・南北幅54mを測り、溝の外縁幅では東西幅73m・南北幅56mとなる。東辺・西辺・南辺の位置は前段階の位置がほとんど踏襲されるのに対して、北辺は北側へ約20m移動している。その結果、屋敷地の東西幅は前段階と同様に2/3町（約72m）が維持されるが、南北幅は１/２町（約54m）が意識された状態へと変化しており、敷地の南北幅が拡大する。屋敷地を区画する溝は結合してコーナー部を形成する状態が東辺で明瞭に確認されており、閉鎖的な屋敷地空間の創出が予想される。前段階の途切れた溝の状態とは異なる。

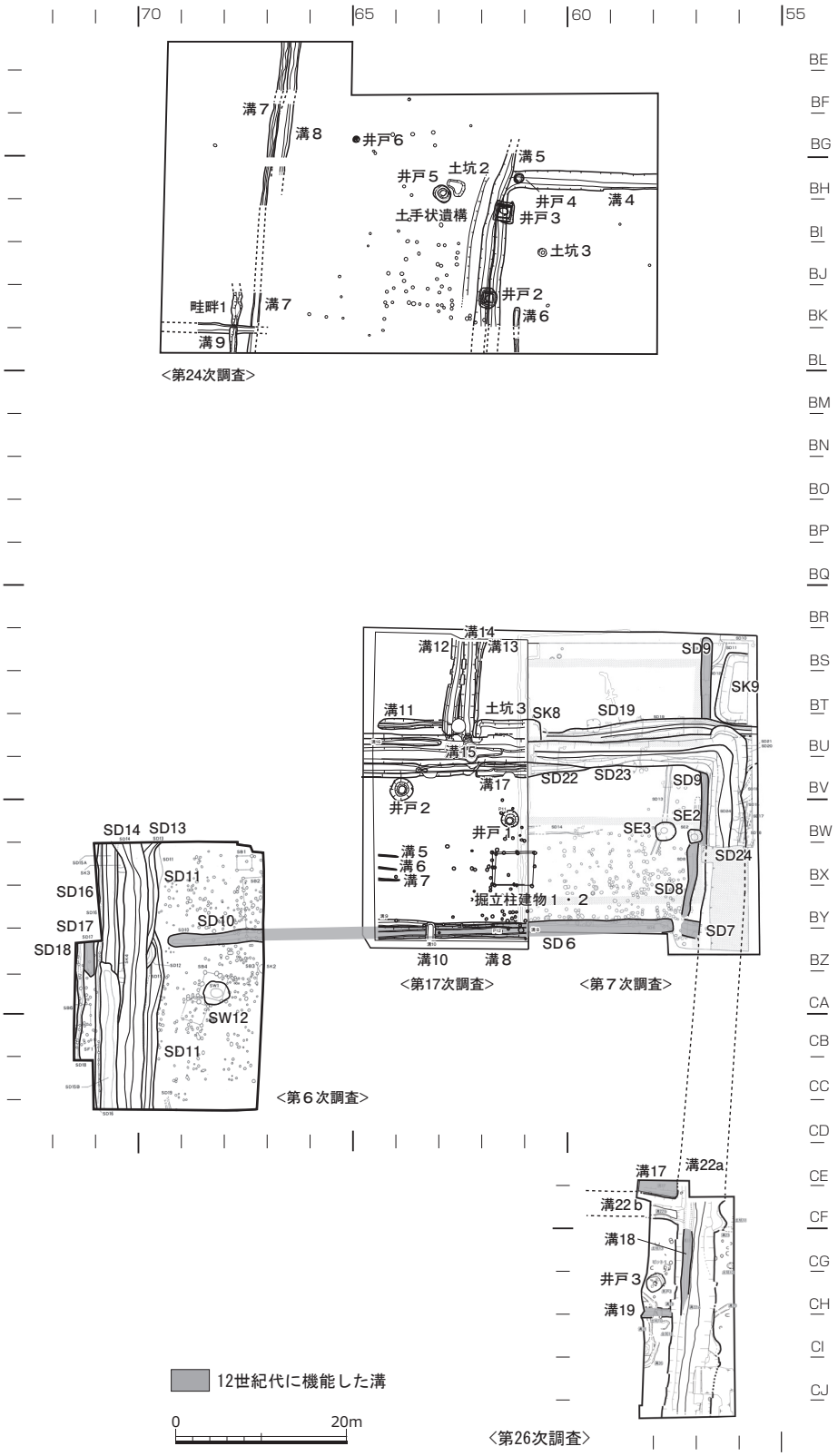

図83　鹿田遺跡西端付近における中世前半の遺構配置（縮尺1/800）（各報告書の図に加筆）

こうした屋敷地内には、前段階に１/３町区画の二つのまとまりを想定したが、本段階においても同様の状況が復元される。柱穴・井戸などの遺構分布は、62ライン～65ライン付近（第17次調査地点）で極めて希薄あるいは空白となっており、その東・西側（第７次調査地点側と第６次調査地点側）にその集中域が広がる。また、第17次調査地点の南端部で検出された南北溝S17－溝10が位置する63ラインは、屋敷地内の敷地を、東西幅約34mに二分する位置に合致する。こうした状況は、屋敷地内に東西二組の利用空間の存在を示唆するものであろう。また、屋敷地の東辺を構成するS26－溝22ａは、南辺にあたるCEライン付近以南へと延びており、同溝脇にはS26－井戸３も確認されることからも、本屋敷地の南側に別の屋敷地の配置を窺わせる。

【BTライン以北の状況】 BTライン以北では、本屋敷地北辺の中央部付近から北に延びるS17－溝12～14の存在が注目される。北辺を形成するS17－溝15と連結する同－溝14の南北ライン上には、北側に位置する第24次調査地点のS24－溝５が確認される。両溝で構成される南北ラインは本屋敷地の東辺ラインの軸方向とほぼ平行する。また、S24－溝５には、BGラインの南3.5m付近で東西に走るS24－溝４が直交してとりつく。同溝からは新しい瓦も出土しているが、機能した時期が本時期までさかのぼる可能性が考えられることから（南2018）、S17－溝15（BUライン）の北側に区画が想定される敷地の北辺を区切る溝と理解される。本屋敷地の北辺からの南北幅は、溝の中心間で67m、溝の外縁幅で70mを測り、同敷地の南側に接する本屋敷地の東西幅の値に一致する。こうした数値の共通性は統一された区画基準の存在を示唆する。また、北側に想定される敷地区画の西辺にあたるS17－溝14は本屋敷地の東西幅の中で、東側に30m、西側に38mの間隔を有す位置で連結しており、BUラインを挟んで、北側と南側に配される屋敷地区画の配置が、敷地幅の約１/２を東にずらした状態にあったことが確認される。

その他に、第24次調査で報告された南北溝７・８については、第６次調査の西端部を南北に走る溝群S6－SD13～16の方向に延びるが、その軸方向はやや異なっており、直接につながるかどうかは今後の検討が必要である。ただし、その方向は現在の鹿田地区の敷地ラインに近いことから、集落の西端を区切る溝となる可能性が指摘される。

以上のように、本調査地点の成果によって、鹿田遺跡西端周辺での既往調査成果を結合することができた。今後、こうした成果を含めて鹿田遺跡全体の土地区画の復元については、機会を改めて再考したい。

引用・参考文献

松木武彦・山本悦世編　1997『鹿田遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
南健太郎編　2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山口雄治編　2019『鹿田遺跡13』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第35冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山本悦世編　2007『鹿田遺跡５』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター